

Göttingen-CODATA RDM Symposium 2018 ; Pre-RDA

Symposium, 'The critical role of university RDM infrastructure in transforming data to knowledge'

参加報告

報告者 :

南山 泰之 (情報・システム研究機構国立極地研究所)

日時 : 2018年3月19日(月) ~ 20日(火)

場所 : SUB Göttingen Historisches Gebäude (ドイツ、ゲッティンゲン)

シンポジウムのページ :

https://conference.codata.org/2018_Goettingen_RDM/

当日のツイート :

<https://twitter.com/hashtag/rdmgoettingen?f=tweets&vertical=default&src=hash&lang=ja>

1. 概要

本シンポジウムは、ベルリンで3月21日(水) ~ 23日(金)に開催予定の RDA 11th plenary meeting のイベントとして、ゲッティンゲン大学と CODATA の共催で開催されたものである。シンポジウムでは、各国の大学で試行錯誤が進められている研究データ管理に関する取り組みにつき、大学、図書館、IT 部署ほか関係部署が果たすべき役割、あるいは立ち位置を中心とした事例報告やディスカッションが展開された。以下では、各講演及びセッションの概要を報告する。

(会場の様子)



2. 各セッションの詳細

2.1 3/19 Keynote 1 : 9:00 – 10:30

キーノートでは、テーマに沿った形で 3 人の有識者から各々の問題意識と取り組みが展開された。ここでは概要のみを記す。

・ Setting the scene from a researcher's point of view - Peter Fox

Rensselaer Polytechnic Institute の Peter Fox 氏からは、Deep Carbon Observatory (DCO) におけるデータ公開の取り組みが紹介された。

<https://deepcarbon.net/>

<http://tw.rpi.edu/web/project/DCO-DS>

DCO では”all information is linked and traceable”をテーマにデータポータル構築を進めており、RDA のアウトプットも積極的に取り入れながら、1) 識別子 (DCO-ID) の付与や他の識別子 (DOI、ORCID 等) との連携、2) データ引用情報の提供、3) 他のデータリポジトリとの連携、4) メタデータ管理などを行っているとのことである。データリポジトリからの連携対象として、ソフトウェア、ツール・アプリ、統合アプリケーションがあり、これらに利用者のコミュニティが関わっていくには橋渡し (mediation) が重要になるだろう、という示唆が印象的であった。

・ Research Data Services at Purdue University: An Institutional Approach - Michael Witt

パデュー大学の Michael Witt 氏からは、同大学における研究データサービスに関する紹介があった。
<https://purr.purdue.edu/>

研究者に対して提供するサービスとして、1) 効果的なデータ管理計画の提供、2) プロジェクト・協働スペース (インフラ) の提供、3) データ公開及び DOI 付与、4) データの保存、5) データ共有のインパクト評価、の 5 つを柱に上げ、具体的な取り組みが紹介された。PURR が対象とするコミュニティ (Designated Community) を”purdue university faculty, staff, and student researchers, their collaborators and the current and future consumers of their research data”と明確に位置付け、サービスを展開している点が印象に残った。

・ Filters and firehorses: reflections on a decade of research data curation - David Minor

UC San Diego library の David Minor 氏からは、同大学が提供する研究データサービスの紹介があった。Research Data and Materials Policy を 2017 年に策定し、図書館を中心 (事務局) にしつつ様々な部署と連携しながら研究データサービスを進めているとのことである。図書館が提供するサービスとしては、ワークショップ開催が強調されていた :

<https://software-carpentry.org/>

<http://www.datacarpentry.org/>

2.2 3/19 Parallel Session 1 : 11:00 – 13:00

パラレルセッション 1 では、”RDM solution 1”に参加した。

https://conference.codata.org/2018_Goettingen_RDM/sessions/59/

第一部では、1) データ管理計画作成の自動化 (ELIXIR)、2) DMP サービスモデルの分析、3) ドイツのデータ管理計画作成ツール (RDM Organizer) の紹介、4) データ管理計画の SLA (Service Level Agreement) 検討、に関する事例報告があった。第二部では、研究データ管理を取り巻く事例として 1) 電子ラボノートに関する取り組み (RSpace)、2) 研究ワークフローへの自動的なデータ管理計画取込み (CaosDB) の検討、3) GDPR (EU 一般データ保護原則) が研究に及ぼす影響、4) オープンソースのデータ管理計画ソフト (iRODS) の紹介がなされ、その有効性や影響につき議論がなされた。各発表の概要については上記サイトで紹介されている。

2.3 3/19 Parallel Session 2 : 14:00 – 16:00

続いてのパラレルセッション 2 では、”Lessons from Domain”に参加した。

https://conference.codata.org/2018_Goettingen_RDM/sessions/63/

セッションでは、1) Library of Congress による文化遺産保存の取り組み、2) ヘルスサイエンス分野におけるデータサービスのトレーニング提供事例、3) ニューロ科学分野のワークフロー補助システム (NOWA)、4) スイスにおける環境データポータル (EnviDat) 構築、の事例紹介があった。各発表の概要については上記サイトで公開されている。

2.4 3/19 Keynote 2 : 16:30 – 18:00

本キーノートでも、引き続きテーマに沿った形で有識者 3 名から各々の問題意識と取り組みが展開された。ここでは概要のみを記す。

・ Rethinking institutional RDM strategy: Applying Collaboration to Affect Change in the Research Landscape - Lisa Johnston

ミネソタ大学図書館の Lisa Johnston 氏からは、同大学が展開しているデジタル技術活用支援プログラム”DASH : Digital Arts, Sciences, & Humanities”に関する事例紹介があった。

<http://dash.umn.edu/>

同プログラムを通じて、分野を横断した形での教育支援を実現しているとのことである。また、同大学をはじめとする米国の複数大学で実施しているプロジェクト”Data Curation Network”に関する紹介があった。

<https://conservancy.umn.edu/handle/11299/188654>

<https://sites.google.com/site/datacurationnetwork/>

Alfred P. Sloan Foundation の助成を受けて実施しており、データキュレーションが出来る人材の確保と交流のネットワークを構築するプロジェクトとのことである。

・ **Dataverse and RDM Opportunities at Harvard - Bob Freeman**

ハーバード大学の Bob Freeman 氏からは、同大学で展開する”Dataverse Project”に関する紹介があった。

<https://dataverse.org/>

同大学では 30 以上の図書館が dataverse を使用しているとのことである。また、電子ラボノートに関する取り組みも紹介されていた。

<https://datamanagement.hms.harvard.edu/electronic-lab-notebooks>

・ **Actors, Factors, and Gaps: Managing Data Holistically at Stanford - Tom Cramer**

スタンフォード大学の Tom Cramer 氏からは、同大学における学内協働の取り組みに関する紹介があった。

<https://library.stanford.edu/projects/rialto>

同大学のデジタルリポジトリ、プロファイル管理システム、研究管理システム (SeRA)を連携させ、キャンパス内のデータ管理に活用する構想が紹介された。

2.5 3/20 Parallel session 3 : 9:00 – 11:00

3 回目となるパラレルセッションでは、”Implications of FAIR and Sustainability”に参加した。

<https://conference.codata.org/2018 Goettingen RDM/sessions/66/>

セッションでは、1) 一次データの解釈を推進する基盤構築の試み、2) 地球惑星科学分野における FAIR open data への取り組み、3) データとアプリケーションの保存レベルに関する検討、4) データ管理計画実施にかかるコスト試算、5) 専門分野ごとの研究データ管理のフレームワーク検討、の紹介があった。各発表の概要については上記サイトで公開されている。

2.6 Keynote 3 : 11:30 – 12:30

最後のキーノートでは、ピッツバーグ大学の Liz Lyon 氏より”Stewardship and Science: Reflections on Data-driven Opportunities for Libraries”と題した講演があった。昨今の米国における助成機関ポリシーの動向、FAIR の潮流や RDM サービス実施に関するアンケート調査を中心に、ライブラリアンの役割に関しての考察が紹介された。

3. 所感

各大学・機関の研究データ管理基盤をテーマにしたシンポジウムということもあり、ソフトウェアに関する発表が多数を占める中、ミネソタ大学図書館の Lisa Johnston 氏による”Data Curation Network”の取り組みは興味深いものであった。データ管理の手法やスキルは研究ごとに異なることも多く、ソフトウェアではある程度標準化されたサービス提供にならざるを得ない中、一定の経験とスキルを持つ柔軟な人材をサービスの「基盤」として位置づけ、共有する本取り組みは極めて有意義な実践に思われる。今後も注目していきたい。

また、ライブラリアンとしての視点からは、各大学図書館の役割として機関内の関係部署を繋ぐ立ち位置のみならず、研究データ管理の動向調査、機関内への報告・提言といった「図書館による主体的な」情報発信が重要な役割として認知されていることが窺えた。図書館として、各大学・機関における意思決定プロセスに積極的に関与していく姿勢の重要性を再認識したところである。

以上